

最近の蹄病では、DD：趾皮膚炎は当たり前のように見られる疾病です。そして、趾間の皮膚にも感染し、胼胝（タコ）のような趾間過形成との合併も多くなっています。今回これら合併症について調べた結果を報告します。

牛の趾間過形成の原因 因子と治療方針の検討



趾間過形成 DD 趾間フレグモーネの合併

正常

【はじめに】趾間過形成(Interdigital Hyperplasia: IH)は、乳牛にしばしば認められる趾間皮膚の反応性増殖病変であり、その発生には機械的刺激や感染性病変の関与が示唆されている。病変の大型化や潰瘍形成を伴う場合には外科的切除が選択されることが多い。しかしながら、IH 発生には、内外蹄の開張や負重異常に起因する軸側蹄壁からの機械的刺激に加え、趾皮膚炎(DD)や趾間フレグモーネ(IP)などの感染性病変も関与している可能性がある。本報告では、IH を単独病変として捉えるのではなく、その原因因子に着目し、治療方針について検討した。

【材料及び方法】2024 年 1 月 1 日から 2027 年 7 月までの間に THMS で阿部初診で、IH 罹患牛の治療を行った乳牛 178 頭 (178 肢) を対象とした。各症例について DD, IP, その他蹄病の有無, 罹患肢以外の IH の有無を、主治医の見解を写真・カルテからの後追い調査した。さらに、それらの症例に対して行った治療について調査した。一方で、THMS の獣医師の治療方針をアンケート調査した。

【結果】まず、治療方針として、「軸側蹄壁（特に過形成との接触が推測される部分）を切除し、蹄壁の平坦化を行った後に両蹄尖を合わせて疼痛があるものは即ち過形成の切除を行う」とした獣医師が過半数を占めた。症例調査では、多くの症例において DD, IP を併発していた。IH 切除例ではその後治癒に向かうものと、感染が深部に及ぶものや、軸側蹄壁の裏に及ぶものがあつた。IH 非切除例で DD 併発例では、DD の処置と蹄壁の平坦化を行ったものの多くで過形成の縮小化が認められた。IP 併発例では全身の抗生剤投与を合わせて行い、多くが過形成の縮小化が認められた。しかし、切除例、非切除例ともに過形成の再発例が存在した。再発例には IH が複数肢に発生していた例があつた。

【考察】IH は慢性的な機械的刺激あるいは感染性刺激に対する反応性増殖病変であり、病変のみを切除しても刺激が継続する場合には再発する可能性がある。DD や IP の治療、ならびに軸側蹄壁の突出による機械的刺激の除去により病変の縮小が認められた。一方 IP 併発例では炎症性腫脹を過形成組織と誤認し過剰切除につながる危険性がある。以上より、IH の治療では病変切除に先立ち原因因子の評価を行い、切除症例を選択し過剰切除を避けることが望ましいと思われた。

今回の学会発表を道内の獣医師と、その後の護蹄研究会で多くの削蹄師さんたちとも共有することが、お互いのレベルアップにつながることを期待しています。農家の皆様、日常の症例を任せていただきありがとうございます。感謝いたします。